

松山大学大学院言語コミュニケーション研究会

第6回例会 特別講演会

● 日時：2017(平成29)年6月17日(土) 受付:14時30分より

● 場所：松山大学カルフルホール

※伊予鉄市内電車環状線「清水町」駅下車、徒歩約5分(松山市駅→鉄砲町駅約20分)

※大学ホームページ(<http://www.matsuyama-u.ac.jp/>)ご参照のこと

● 参加費：無料(学内外者問わず)

◆会長挨拶(15:00～15:05) 瀧 由紀子(松山大学大学院言語コミュニケーション研究科長)

◆特別講演(15:05～16:30)

題名：「夏目漱石における創作・絵画・ビルドゥングスロマン」

司会：矢次 綾(松山大学大学院教授)

講師：松村 昌家(大手前大学名誉教授)

要旨： 夏目漱石は『倫敦塔』の末尾に、次のようなことを言い添えている。「二王子幽閉の場と、ジェイン処刑の場に就いては有名なドラローシュの絵画が藪からず余の想像を助けて居る事を一言して聊か感謝の意を表す。」これが具体的に何を意味しているのかをドラローシュの絵画に即して、まず解き明かそう。そして次には、少なくとも個人的美術収集としては世界一と言われていた、ウォレス・コレクションに光をあてる。とりわけヴォラプチュアス美人画を描いたジャンーバプティスト・グルーズの名画には、漱石自らも直接に接していた。作品『三四郎』において、グルーズのヴォラプチュアス美人画を挟んで主人公と美禰子との間に妖艶な対話が交わされる場面は、大いに読者の注目を引き、関心を深め続けていることであろう。

しかし『三四郎』に関してはもう一つ、見逃してならないことがある。漱石がそれとなく決めていた作品の標題『三四郎』の素案には、ビルドゥングスロマンのニュアンスが含まれている、ということである。

しかも蘆花徳富健次郎が「ビルドゥングス」の秀作ともいべき『思い出の記』を書くために粉本を求めたのは、ほかならぬチャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』だ。それは、われわれにとっても格好の研究課題だと思わずにいられないのである。

【特別講演講師紹介】

松村 昌家(まつむら まさいえ)。

日本の英文学者、比較文学者。同志社大学教授、神戸女学院大学教授、甲南大学教授を経て、現在大手前大学名誉教授。著書・訳書多数。最近の著書として、『十九世紀ロンドン生活の光と影——リージェンシーからディケンズの時代へ』(世界思想社、2003)、『文豪たちの情と性へのまなざし——逍遙・漱石・谷崎と英文学』(ミネルヴァ書房、2011)、『ヴィクトリア朝文化の世代風景——ディケンズからの展望』(英宝社、2012)、『大英帝国博覧会の歴史——ロンドン・マンチェスター二都物語』(ミネルヴァ書房、2014)がある。岩波書店から刊行中の『定本漱石全集』第二巻では、『倫敦塔』『カーライル博物館』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『薤露行』『趣味の遺伝』の注釈を担当している。



【キャンパスマップ】



特別講演は非常に混雑が予想されますので、お早めにご来場ください。

(開場 14:30~)

問い合わせ先:

松山大学教務部教務課 大学院言語コミュニケーション研究科担当

電話:089-925-7111(松山大学代表)

松山大学大学院言語コミュニケーション研究会 第6回例会 特別講演会

講師

松村 昌家

(大手前大学名誉教授)

司会 矢次 綾

(松山大学大学院教授)



特別講演会

夏目漱石における創作・絵画・
ビルドゥングスroman

2017年

6月17日 土 15:00-16:30

於・松山大学カルフルホール

※当日は混雑が予想されますので、お早めにご来場下さい。(開場 14:30～)

お問い合わせ

松山大学大学院言語コミュニケーション研究会事務局

TEL: 089-925-7111 (代表)

<http://language.matsuyama-u.ac.jp/>